

囲碁 広がる授業

思考力や大局観育む狙い

子どもたちの考える力を育もうと、囲碁を授業に採り入れる小中学校が増えている。大学では、九州大が昨秋から半期の講座を始めた。囲碁人口の裾野を広げたい日本棋院も積極的に講師を派遣するなど、教育現場での普及に力を注ぐ。

日本棋院も協力

「今日は、終盤の戦い方を学んでもらいます」
熊本県宇土市の県立宇土中学校。昨年10月、2年生の囲碁の授業があった。教壇に立つのは地元のアマチュア7段の蛇島知誠さん(72)。同県南部の囲碁愛好家グループ「一碁一会の会」の5人がサポートに入る。平松拓人さん(14)は「石の取り方もゲームの終

わり方も難しい」、石村妃君智さん(14)は「先を計算しながら進めるのが面白い」。
同中では2013年度から囲碁を導入した。総合学習の時間を使い、1年生から学ぶ。2年生は1年間で約10コマ。1年生は昨春、プロ棋士の石倉昇九段に指導を受けた。導入当時に校長だった越猪浩樹・県教委

高校教育課長(55)は「地域の力でじっくり子どもを育てようと考え、囲碁に至った」と話す。陣取りゲームである囲碁を通じ、論理的な思考力や大局観、相手の

意図を読むことによるコミュニケーション力が育まれると期待しているという。
プロ棋士招く
福岡市立舞鶴小と鳥飼小



① 囲碁を学ぶ生徒たち 熊本県宇土市の県立宇土中学校
② 小さな六路盤を使い、実際に碁を打つ学生 福岡市西区の九州大伊都キャンパス



東北大加齢医学研究所の川島隆太教授(脳科学)は2006〜07年、小学生(低学年中心)130人を対象に囲碁に関する調査をした。
週1回1時間の囲碁教室に3カ月通うと、子どもたちに思考力や短期記憶力などのテストで大幅な得点増がみられた、という。
また、11年に都内の小学2〜4年生計36人に週1回1時間の囲碁

囲碁習うと…… テスト得点増の例 自己抑制力も養う

講座を計6回受けてもらったところ、感情や行動をコントロールする自己抑制力が伸びている可能性が示された、という。
川島教授は「思考力や自己抑制力は、脳の同じ領域の機能。囲碁はそこを鍛えている」と分析。「自己抑制力は社会生活を送る上で大切。子どもの遊びの中に囲碁を採り入れることは大歓迎だ」と話している。

浩美校長(55)は「英語や国際理解の推進が叫ばれているからこそ、身近な文化を知るのも大事」と言う。武宮五段とともに指導にあたり、同市中央区で学童保育と囲碁教室を兼ねた「桜道場」を運営する森靖子さん(60)は「相手の立場に立って考える力も身につく」。

九州大は単位

大学にも広がる。九州大

日本棋院も若い世代への囲碁の普及に力を入れる。学校囲碁推進室を14年に設置し、14年度は全国37の小中高校で、授業時間にプロ棋士らが指導した。担当者は「今後さらに多くなるだろう。小学校を中心に問い合わせは多い」。

将棋の採用も

将棋界も学校での普及に力を入れる。
日本将棋連盟は06年に学校教育課を設置。同課によると、東大や弘前大など8大学で単位が与えられる将棋の講義がある。東京とその近郊では、都立高校などが総合学習の時間に採り入れるなどしている。
(渡辺純子、山下知子)